



中央大学工学部 電気工学科同窓会誌 第2号

発行所 東京都文京区元町2の37 中央大学工学部電気工学科同窓会 (電話 92-3352, 3055)

所感

工学部が創設されたのは昭和二十四年四月でしたから、滿十年整となりました。この三月には本七回の卒業生が出席、この同窓会の会費も四九〇名に達しました。お蔭様で中大の電気工学科も多少世の中に知られるようになりました。たとえば入学志願者数は年々増如し、ことしは七三二名で定員の十八・三倍でした。へちまみに土木五九五名、精励五六〇名、化学五六五名の志願者がありました。まだまだ販の方も昨年度は二四〇の会社から求人がありました。このように電気工学科が世の中に知られるようになりましたのは、卒業生諸君の努力に感謝したいと思ひます。どうか今後とも頑張つて下さい。

次に小生の近況報告を一筆致します。小金井へ移転してから六年に存りました。春は秩と新緑の香り、夏は蝉の声、秋は紅葉、冬は霜柱の道を通勤して行きます。昨年六月に相当好きだった煙草をやめてから肥ってきました。お酒の方もこの頃はよわくなくなりました。子供四人と妻は元気に暮して行きます。長女はグレメンチのソナチネや、エリーザのために、冬ど練習して行きます。

最後に同窓会誌創刊号は吉江君・長田君の御筆力により発行をみました。この才二号も吉江君のお骨折りにすぎました。同君および投稿を頂いた諸君に感謝をこゝげたいと思ひます。

吉久信幸

若葉の頃と暮り、私達を郊外へ郊外へと救知れず踏み付けられているボスタシを見るにつけ、なかも一番宛を引かれたのは「十和田」という太字であつた。〇月〇日より函張、ババ開運：「未だ九十和田へ。昨年の夏の旅行が回り澄龍のように睡つて私を他の世界へと一瞬又一瞬：誘つて行く。

画六公爾十和田は人の訪ずれる期間に短かく、春の訪ずればやつと四六下旬になつてやつてくる。久いクハ眠りから覚めた春であり柳へ付けられていた希望が一度に破れ、たかめのように、生命ある木にはおもおもと先を争つて美しい表ひをする。太陽の季節とはいえ北國の光線は東京よりはななり

十和田の日記より

●弓削田正和●

わく感じ
うれ、葉
葉の光線
は金若の
ファイルタ
ーを覗い
ているよ
うな、そ
して常に
新鮮な、
木々しい
若葉の色
を混えて

いるが、その春は短かく、十月頃になること一夜にして紅一色になり、緋爛豪華のままに終りをとげる。何と半年に滿ちぬ命でこゝを訪ねる人の数は年々増如して行くとはいつても知れたいものである。都会近辺の山岳とは全く違つた、紙グズのない新鮮味そのものの公園である。この公園も都人のものになつてしまつたら非常に敷けかわしい幸甚なることであらう。心ある諸氏よ注意して行なう。日記をめぐつて思ひ出を書くことにする。「八月七日夜、夕立上りの上野駅二二時一五分二二一列車青森行、暗闇の中にくつきりと浮刻りの様を上野駅構内信号灯の

光が寛送つてくれた。勿論同行の志は在り。夜汽車の旅は疲弊するが、旅行してゐるのだと云う気持ちに私にとつては非常に楽しい。旅は直ぐれというが隣席の若くは面もななく友人になつてしまふ。今まで全々予期した事の如くような人々、例えは出稼ぎ帰りの青年、大工、中学教師、東北百姓のおかみさん……

仙台は七夕祭の異物だけで我慢する予定であつたが、青葉城址に立ち蒞成の月を冠い、松島灣にオニルを立て、その夜の宿は仙台港ニ泊三六分書林行、東郷の少く左の列車は疲れた上り足定まらず一變入りであつた。

八月九日

夜は三日目を際り夜かり木だ見ぬ異郷に降り立ち落着かず。ともするの取返しのかめ向連(い)でも走しそうを不安にさらされ、五賃巨額の荷物も少々身にこたえた。青林の駅頭には十和田湖園鉄連絡バスが巨柁を三つ並べてゐるのみが目に映つた。

函館ではほんんとすんでおいてより程、運給バスの車掌は小くやむるが、こゝでは三拍子揃つた。父がイルが声をしきりと説明してくれてゐるが、その当座はカベラの故障のため説明どころではなかつた。マイルムが途中であつたのは、心配は悪用であつた筈だが……

青林から十和田に這入つて初めの温泉跡跡跡易に着いて、まず写真室をさかした。地に頭を付けるよつた覚悟で左のんだが、相手は全然人回味なく冷たかつた。何か機が廻り事をしたかのような相手の仕方であり、最後にはその妻君らしき女までが出て来て、「ダメだといつたら駄目だ。家はそんな衣服は無い」といふ態から身体を横たえてゐるのに両いた口が塞がらなかつた。今一軒の写真屋さんを探しあて、頭を高くしてお願ひしたが、心好く暗室を貸してくれ

た。同じ温泉の人間であつたが、こんな空気に走らうと前があるだらうか。この温泉に恐れをなし、そとくささ立去つた。予定は相対のマーティンを取つてあつたが、一時前半の「Bag」を調整するのには不可能であるがといつて暇を湯に引き返す気持にはなれず、単独登山であること、疲れた考慮して予定最後の高田大岳(一五五〇米)を試みた。この山は登山者のため山でなく、山道は目標に向つて唯一筋、草木に手を貸りなければ一歩たりとも前進不可能な所が各所に待ち受けてゐる。人間社会と同じ様を争はどこにでもある。この苦難を切り抜けた後の征服に快意をおぼえる。

高山植物が所々にあるが、窪みに掛けていた石南花の美しい。四枚葉弁は硬く実を飾んでゐる。晴天に照されれば、太陽洋もみられようが、もや立ちこめて視界がさかぬ。獣が吠を喚ひ荒らしたのであろう。白鳥が短気味な光景を呈し、一人登山の所為もあつて、言葉にならぬほどのさびしさが、一時私の身を刺し早下山頂の気分はひとまきりもなく消しさられ、その後には並気に似た悲愴のみしななかつた。

湯舟

八月廿日ではあつたが雨に打たれた、夕方ももろろと、疲弊した身に寒気がしみる。谷地温泉の主人は、宿は湯買だが家族の一語でよかつたらと同情的であつた。それは、少し暇しい次第であるが帳場に出した名刺のお蔭によるものである。

この温泉の奇けた話を一つ。何はともあれ、湯にはいれぬ云うので、女中に案内されるに任せて風呂に行く。脱衣室には二三人の植物が祝ぎすてであるだけなので、湯舟はからかうで

あろうと想像した。左にあらざ、二つの湯舟には三十人はいたであらう。ほんとおどろいた。私は隔つこの方に小さくなつて這入つた。東北の百姓さんの湯治客と見ゆる。全く悠長なもので誰一人として上つて行く願もみせぬ。町の銭湯で三十分も坐つたり頭がおかしくなつてしまつたらうが、お腹、手はあつてると冷々とする。一人の娘さんがやつて来た。恥しりか腰巻をしたまゝ湯舟へ。今度はおぢりさんがぬれかんどのまゝ手拭をひき上げて立去つて行つた。あとで聞いて知つたのであるが、下半身のものも着けたまゝ、風呂に入る習慣があるのだとのことである。すると何と着けずにはいつたのは私だけかと赤面した次第である。

「奥入瀬」の溪流

文豪大町稚月は十和田の美を彼の文筆をもつて世に紹介した者の一人で、明治の頃は木だ知られざる神秘境であつたのがいなり。十和田が国立公園の指定をうけたのは昭和十一年。今日では完備したバス道がある所では清流が道を渡し、何回が溪流を渡り渡つて延べ十四料バラエティーに富んだコースだ。重い荷物はすべて温泉泉の木賃宿(一泊百円)に降し、腰に乾パン袋、肩にはカノラの軽装。この十四料の眺めは赤いた者のみの知る溪流美である。バスではもの一時間とかからきりおだやかな清流も、一度谷岩に碎けると急流となり、岩に立てば吸ひ込まれそうなきがする。程月、

若くは若あり木だる川中の千鳥かすめて、川鳥と心と詠んだ。秋も又美観である。いつの口かまだ訪ずれるを来しめとしてゐる。(一九五七年)

会社でのエピソード

山口岩男

有能なるA君、会社の命により支店所の設計を行つた。最新技術を導入して理論的に優秀なる設計を了え、工事も無事完了と相成つた。その功をたゞえて初代所長ということになるのだが、家に帰り設備の優秀さを自慢まりげに妻に話すと妻は「つまりなぞうを頼して」

新入社員の錯覚

- その一 紙に画えつた居眠りが出で、深長も教師にみゆ。
- その二 日曜だけの休みではもの足りず、今年の夏休みは何日からだったか存？
- その三 毎日講習会をうけてサザリーをもらひ、月謝いくらねーか？
- その四 講習の先を案じ、この講習は何単位だけ？(へもちろん課長の講義を居眠りしてさげばよろしい)
- その五 休講の悪文ども、隣席内は「巻の島」(映画をみるわけには行かぬ)
- その六 掃除は掃除走帯(ヘンツパー)さんするものと思ひこみ、紙屑散らばせば上司からなられる。

(才四期生
山口岩男)

と長々一帳の設計書をよみあげた。妻「近代設備と私ごどつちが大切？ 私ばめんなへんじを土地には絶対に行きませんよ。そのことが判るまで一人でいつてらうしやい」A君一人さびしく暮らす入り「あ、おれは妻への仕度書に今一頭目書き添えておけばよかつた」とつがやした。(才四期生)



山口岩男

「北海道はよいとこ一度はおいで」と誘つても北海道は東京からは遠くはなれてるので、一寸の用には来れない。東京で想像してはたよりさばるかに度く、まず気が入さくなる。何しつ「当地」といふより「おらが郷」といふと真合だ。これは北海道に在る人はこれでも自己を表現する時につねに「道」を表現す。「土一弁金一弁の銀座」とはおごりや実存り、すべてが雄大そのものである。怒の小さい方は北海道如何ですか？しかし、東京では食をしても食えるというが、「おらが道」ではいかなる。「竹かざるもの食うべからず」だ。幸にして北海道に「飯を食う種が甘米だのほうれし。先輩の鈴木さんが常務社で北海道に先に来られてる。そうだがまだ連絡がとれない。早く先輩に会いたい。先輩がいふために入社して各所で紹介されるたびに「中大に優秀料があつたのか」と聞かれる程やボなことはない。しかし中大の五は何かにより進路に知れぬ親しまれてる。それも法學部などの中大の先輩が菜ぎ上げたものらしい。だがこれからは法學部だけのものでなく、中大電氣科が活躍しいよいよもつて白門

の名を天下に示すとさだ。入社して本所で先輩本店日付会より歓迎会を開いていた。心の通るまる起いがし、その時に始めて「University」の良さを知つた。その時にも大ぜいの人が法學部出身であり、法學部で睡眠一だつて、私ばつれしさと同時に工學部のこととを運んだ。先輩は後輩の来るのを待つてくれる。又来るように順手にしてける。これは内情は去しだが、その席上先輩「本年度の大学生の入社試験の一般競争の問題は中大新陣の中に出てゐる入社試験問題の中からのみとり出した」と云われだ。それだけに中大のすべてに對してつねに先輩たちは注意して後輩のたのむを起つてゐるのだ。また先輩は一次試験場を

真理は永遠なり
本多光男

結語

真理は永遠なものでなければなりぬ。又永遠なものがあるという考え方を支持してみたい。それは或る意味では当然の事柄かも知れない。けれども私は真理は永遠なものでなければならぬという、考え方に一つの興味を覚えたのであえてその説明をしてみたいのである。真理は永遠なものでなければならぬと、真理を一つの内へ入れてしまつてしまつたのは、本来真理は一定の枠の内に入つてしまふべき性質のものではないし、又入るべきものでもないように思ふけれども、逆説的に真理は永遠なものでなくその極限が近く近在に存在するものであるとしたらどう

中大にしたのもその旨めだと云われだ。奥のところが私に比叡の一次試験をうけた時、技術問題がまあまああったが、一般教養がさうばり出来なく、「だめだ」と舌久先生に申し出てその日はがっかりしてねて了つた。翌日の発表の時も外に行く元氣もなく、学校を休もうかと思つた位だが発表が中大講座であるので外に行つた。それが受かつたのだから世の中は不思議なものだ。これも一つには先輩のしからしめることだ。と今になつて感謝している。このように記事を書く場合に於いても在學生には仮わらなうかと思つたが、何等かにか知りせることが出来るだらう。又この様な在學生の意趣を在學生に伝えるようにするのが同窓会の役目であらう。

一つの被恩に使つて表記の支持意趣を略すかしようという方途をとれば、それを一つの碑の内にに入れておいてもよりよき安んずする。

説明 (1)

「真理」ということは或る意味では平常に真然として居ると思ふことです。真理の探究とか永遠の真理とかいう言葉は我々が日常よく口にしたりするけれども使つする割合には全く真然として居るやうに思えます。

唯かに永遠なる真理は真然として居るといつのが当然であるやうに思えます。又、それ故に蘇有があるとも思えます。私はこの與行の広い言葉の意味に興味をおぼえ理屈をわづかすたいのです。

説明 (2)

今、真理の探究がごく直に存在すると仮定しても人の生涯の精神活動期間のスケジュールをもつて真理を求めつてやうなことをすればやはり真理は永遠のもの

三十一年三月まで先輩のようなところで切っておられ、又どのやうな気持ちでおられるのか、が全く不明であつた。それどころか卒業時にはじめて同窓会を知る始末で、これは良くない。早く改めたい方がいり。それにつけては、「理窟科一本の有教の友組合をなすことだ」と、在學生に対しては一年、二年、三年、四年、大学院まで互に知る機会をもつべきで、お互に知る機会をもちたい。大学院に先頭に立つてもうい、又在學生の間に同窓会をなすことは研究、被恩に役立つはず。名義は改めて、京大電氣科のやうな在學生も入れた方がいり。又私のやうに鋼筋のやうな処に居るもののため同窓会支部をもつけるやうにしたい。(昭三二年)

であると考えるのが当然すぎる。真然であるにちがひない。真理を汲みとろうとする人間の自然への欲求、又それが努力の成果の集積がつけには真理の極限に近づいてゆくことには間違いないと思われる。未知なものに対する憧れ、現象に対するおどろき、深奥の欲求が自然なものであればあるほど、真理はいつでもその探究に値する対象物であるのが本来の姿であると思ふのです。そうすれば、真理は汲めどもつきることのなかり無限の泉かもしれたい。

地球の諸現象、地上の諸原理生物の精神活動などのすべてを包含し三宇宙の神秘の諸現象の根源を、神又根源を天賦する法則、原理を真理という言葉で表現しているやうに思われる。

現象を追究し物の根源を明らかにしようとする未知のものに対する欲求や探険しようとする試みは純粋であるはずが今日真理の探究と呼ばれて、(未完)

此の頃

○世の中には腕のいい奴が居るもので話だろ？ すこい美人をせしめて得たとして居る人は、全くうらやましき隙り、今度押しかけて行つて、ゆくりとながめようと思つて居るが、現在彼女が故障に陥つていて病がみられなりのみだり。しかしこの記事が皆さんの目に入る頃は御二人の間の結婚が誕生して居る事でしょう。大さ友大夫、奈赤ちゃんでありますやう、みなさんで祈りをいもです。彼も今時で以上増々仕事に精進できる事と期待して居ます。彼の名は垣田氏也。

○出口式北海道電力に入社時阿寒湖近くの発電所勤務。機が旅行の折、阿寒湖美幌と一語に旅行してくれながら、共に思い出す多々たのしいものでした。旅行記は感念をみて小さくつむりだが、彼は元気一杯すつかり北海道へ子に帰つたやうで、ピリカメノコを相手つに大いにやつてまわつたといふ思つて居る。昨年北の霧丸に転勤せよそう札幌へ来たが、そなたが早退さう。そなたものがでさたら報告をまつて居る。

○清水氏、殊岡氏も北海道で大いに活躍、昨年上京語り合つた。結婚の話もあつたやうだが確執をうらや。小生も本大電氣科に勤務して居る。相変わらずのんびりして居る。みななカタマル情報をお聞くとやはり気になる。

(四期 遠藤正彦)

会負異動 近況

チ一 期生

- 高川正次君 (中野区本町通り三六一番地) 日勤火災海上保険新橋支店電話五七番〇七三〇 前同記載取れ
- 鈴木克郎君 (種須美市子水町一七二二に移転)
- 三石幸佐君 (品川区東戸越町の五〇番本方に移転)
- 若林駿介君 (米田カリアホルニヤ大学大学院へ留学中)
- 吉村輝君 (新宿区上落合一〇四五六 前同記載取れ)
- 中内康雄君 (昨年三月特許庁審査官に就任)
- チ二 期生
- 五十嵐智明君 (昨年始め二世誕生)
- 大塚章君 (広島市東雲町五六八 憲友公社康愛寮に移転)
- 藤崎公長君 (出生、目下激乳のみ飲食中)
- 近田氏 (本年三月教師と結婚、今々勉強中、新居は品川区六井坂下町三六七、大林アパルトメント五号室)
- 小生目下養育中、犬も亦け
- 推野治郎君 (昨年四月結婚)
- 鈴木明元君 (昨年、女子誕生)
- 山村正夫君 (本年二月結婚)
- 平岡清司君 (本年三月三十日名古屋美入と結婚、新居は名古屋市昭和区通川町二五今井方)
- 梁町成一君 (昨年始め結婚)
- 藤島美寿君 (北海道に勤務)
- 弓削田正和君 (昨年二月結婚)
- 高橋明宏君 (勤務区金町三、一九三二、久武方)
- 大沢清君 (女子誕生)
- 小宮隆三夫君 (昨年結婚、現在男子誕生)
- 山本邁君 (本年四月五日結婚、営業技術係に転科)

チ三 期生

- 町田定之君 (昨年結婚、北區志茂町二ノ六三ノ九 国鉄新橋通信区へ転勤)
- 三宮俊郎君 (練馬区中林町二の二〇に移転)
チ三 期生
- 坂倉良一君 (収養を板谷正、岩沼調所所チ一重用課に転勤)
- 荒木貞君 (三重県鈴鹿市白子町鈴鹿学園三重県に転勤)
チ四 期生
- 末田泰雄君 (長野県岡谷市小尾口区五三四四、目下一大事業家となりつつある)
- 遠藤正雄君 (渋谷区千駄ヶ谷二ノ三二池田方、本年四月より中大遊技科に研究助手として勤務)
- 秋山武君 (ペーパーハーフとして勤務)
- 堀中武和君 (昨年結婚、たまつて一人で楽しんでる人だぞれ！)
- 池田嘉彦君 (中大助手、昨年九月辞職、郷里にて郵便局勤務、長崎県南高来郡深江村)
- 今野利男君 (橋本市戸塚区矢部町七六九 新富士五号)
- 宮沢久夫君 (東京都上野市外阿見町立の趣、村山方)
- 村上幸二君 (目黒区中目黒町の一五〇八)
- 柴田利政君 (中野区上高田の一八三加藤方、東洋精機社ステレスエボ所 (一七七四))
- 鈴木均君 (川口市原町四八)
- 富田勲君 (品川区大井林町二八四 東京衛機製造所 (一四一))
- 安里哲文君 (沖繩の米野所に勤務、最近東正巻の並列厚板計算の依頼があり、元気でやつているとのことだつた)

チ五 期生

- 田中武君 (文京区北山町四〇半陽建設) 北東社普救寮に転勤)
 - 及町照六君 (昭天を輝雄に訂正)
 - 松本清三君 (練馬区練馬北町三の一一四三原彰才五線馬北町フロッグ七号に移転)
 - 眞木健次君 (文京区駒込御明町二回ひら立荘内、勤務先福岡エレクトロニクス社に転勤)
 - 庄司俊英君 (尼崎市森野盛の池二六〇本目庄内、昨年四月より大阪府豊前市に転勤)
チ六 期生
 - 重野和夫君 (石川台中学校に勤務先変更)
 - 小林武彦君 (八田区仲蒲田一の七豊荘内に移転)
 - 松尾隆君 (川越水産局勤務)
 - 高橋治郎君 (埼玉県豊原市部磯課勤務)
- 大切な紙衝を借りして優秀なるチ六期生(星)を代表し、三のニユースを擁護致し上げましょう。わがチームの筆頭井浦(沖電氣)氏はこの春の学生会において研究発表をされ、率先より先取果をたごさわかチームの存在を大きくした。我々のクラスは非常におとなしいものだった。しかしうちばんまときりもあつた。おとなしい人たちが本村裕尾、鈴木耀太郎氏などば解かざる沈黙のうちには仕事にテッシーしているものと思われる。悪気持計の稲葉氏は職任のうわさあり、家の後を継ぐかわいひ人はみつかつたかどうか。高橋君氏は転じて埼玉県豊原市に転勤、畑ちがひとはいえ彼にかさわしく動いている。坂野氏もその一人茨城に身を転じ、これこそもくもくと働いている。小野沢氏は望みどおり宇田川に腰をすえ地下鉄の設計に専命である。

○小島次一君(宇田川遊覽士
不台費公社勤務)

○秋野直重君(北海道白糠郡白
糠町天保町北沢方、新白糠農
業勤務)

○小島次一君(大瀨野之林勤務)

○山口重運大君(藤郷)

○交夫君(兼大生産技術研
究所一部事務勤務、名義にあ
る小林方村野山電路で小林(兼
兼三三三三六九)

○高橋健二君(電気接退取)

○塩見徳昭君(兼廣道信救済に
勤務)

○中野武也君(カス化産勤務)

○山本和昭君(会社名不詳之電
機之吏)

○増田一君(就居未定、会社
不詳)

○建業堂では右の如くこの種の大物
大塚建設にがへばる会田氏より
先日メーター修理のことで監査
あり、取送事業の一部を担当す
るのの鈴木氏、NTVの樋山
氏は共に「現場集録」「カラー」
に空をそえていっているようである。
卒業して郷里にかえりそれぞれ
男を娶けて行くものもすくなく
多い。中でも数のおよび藤原氏
氏のつより鈴木(安藤豊隆)氏
はとうしてゐることか。是のよ
わり話から心臓のよわり話にう
つて、いま教壇に立つてゐる藤
原氏彼こそいま首うさかりの工
学上の卵に黒板をたつき教科書
をなで胸をなで弄賊苦斗のよう
である。ついで先日今沢氏が腹を
みせ、東大生研にゐることを知
り、もの勝たな彼には我々の皇
太子のおもかげがあった。卒業
一年「俺」この仕事は「かんし
な」と申す勇も出てきてゐる。
勿体ない話であるが、云々主は

山村(兼遊覽士)氏である。会
社にしては入り人評判のりり人
たちが杖々のクラスには小春り
多い。母とんぞうだ。これま
で述べた地に替る耳に怒じたこ
ころで昭和管見の小尾氏、ユニ
バウクの菱田氏、高田(ハート
ホード)氏、等々がゐる。ジミ
に成長してゐる三番小沢氏もモ
ーターの試作によね人がゐり。
衣々の仲間には友園のと冠うの
は私自身一人かも知れなれど、
彼の製法を生かすめに、入り人材
を必運するのは当然だ。高橋
健二氏は昨年結婚されたが、

◎役員諸氏への御願◎

上記の方々は住所不明で本会から連絡不能です。会費諸
氏の中でお知らせの方の住所階段が重況を御存知の方は本会幹事小
林宛お知らせ下さい。(略敬称)

- 第一期 武末俊一、坊 徳栄、馬場醒一
 - 第二期 五十嵐富男、若野 清、豊岡力太郎、初川七郎、石丸弘
佐藤 正、民輪傳和
 - 第三期 行方二郎、多胡秀雄、坪水敦市
 - 第四期 出井 清、平田正明、初高昭吉、和田進雄、藤尾徳平、
張 家元、成田省三
 - 第五期 浅原良治、菊池洋一、三好 保、内田 信、劉 行泰、
吉松正起、鶴 鎌之助、鈴木 卓
 - 第六期 鈴木 博
 - 第七期 野島年二、磯村豊彦
- 以上の他にお受付の呉がございましたらお通知下さい。

編輯後記

○ 本一号を発行してより本二号発刊まで、幾年月。全く汗
顔の辛りなり。此処に諸兄子の援助を得、本二号を膝下に送る。
○ 幾年月も眠りし原稿あるも今日羊じて隔の目を見ゆ。多謝！
○ 中に、時期的に星々並の愛し有りたるものあり。即ち又す。多々
に深謝すると共に、亦教諭あり。

○ 今回の編輯に当り、小林元にも多大なる助力を賜う。之我のみ嬉し
からんや。

○ 次号の原稿を願って摺筆す。
若江果政彦記す。

い人材が出張するであらう。か
どりせいでまなびださうが、扱
女の仲間には女性に逃げつれど
男も何人かゐる。勿体ないもの
だ。扱が指をかけた足次君であ
る。自分のことをのべるの後か
のちやめちやになつたことか、
昨年の忘年会に於て此たので
二二では見掛けを静かする羽ひ
びつて分た。

本六期 庄
ベナヤケエヤニユーズ
マン